

2014 年度前期

訪問看護師による親との子育ての協働の構造化
～医療的ケアが必要な障害のある子どもの子育て～

聖路加国際大学大学院看護学研究科
博士後期課程小児看護学
沢口 恵

提出年月日
2015 年 8 月 27 日

1. 研究の背景

近年の医療機器の開発や医療技術の進歩により在宅療養が可能になってきていることから、NICUやGCU、小児病棟から高度な医療的ケアを必要としている障害のある子どもが在宅に移行している。医療的ケアが必要な障害のある子ども(以下、子どもとする)は、基礎疾患だけでなく多くの合併症を併発しているため体調が不安定な場合が多く、体調悪化により生命維持の危険性が高くなるような状態に陥ることもある。成長発達が著しいがゆえに体調が不安定になり、医療的ケアの実施だけでは体調の維持や安定化をはかることは非常に困難である。在宅においては、親が中心となって子どもの体調を観察し、子どもの体調にあわせた医療的ケアが実施されるが、親の知識・技術・体力には限界がある。親の知識・技術を補い負担を軽減するためには、定期的に自宅に訪問し親と情報を共有しながら子どもと家族へ看護を提供している訪問看護師(以下、看護師とする)が担う役割は大きいと考える。在宅においては、子育てにおける看護師と親との協働は、特に体調が不安定な時期である乳幼児期の子どもにとって、子どもの体調の安定化と成長発達の促進、地域生活の拡大のために必要性が高い、看護師と親との間で行われる関係のあり方である。先行研究では、発達障害の子どもに対する専門職の協働についての研究は行われているが、看護師と親との協働のあり方については明らかになっていない。よって、在宅での子育てを支援するために看護師による親との協働の構造を明らかにすることが必要であると考えた。

2. 研究目的

看護師が親の子育てを支援するために提供している看護を理解し、看護師による親との子育ての協働のあり方を検討する。

3. 用語の操作的定義

子育てとは、子どもの生命を守り、子どもの成長発達を促し、その子どもらしく家族や社会の中でよりよく生きるための能力をはぐくむこと、とする

協働とは、看護師と親が子どもの体調と発達段階の評価や地域生活に関する情報を共有し、話しあいながら子育てを行うこと、とする。

4. 研究方法

看護経験が5年以上あり、うち小児の訪問看護に従事して3年以上で、乳幼児期(0～5歳)の準超重症児・超重症児の訪問看護の経験がある看護師を研究対象者とした。関東圏内にある、小児の訪問看護を実施している訪問看護ステーション12ヶ所に研究協力を依頼し、看護師15名に対してインタビューガイドを用いた半構成的面接を行った。ICレコーダーにて録音された内容を逐語録に起こし、逐語録から親と話し合ったことや協力して実施したことについて語られたことを抽出した。抽出したのから内容が類似したものをま

とめてサブカテゴリーとした。サブカテゴリーを比較し、類似したものをさらにまとめてカテゴリーとした。各カテゴリーを比較し、関連を検討した。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けた(承認番号：14-011)。

5. 結果

看護師は訪問看護を継続しながら親が心の扉を開くのを待ち、専門家としての立場を守りながら【親子の輪】に入って子育てに参加していた。【親子の輪に入る】ことは、親と子育てを協働するための基盤となる関係になることであった。

看護師は子育てする力を親はもっており、その力が発揮されれば親自身の考えのもと親自身の力で子育てをすることができると認識していた。そのため、【親子の輪にのなかで親とともにあゆむ関係】を維持しながら、親の子育てする力に合わせて【看護師の役割を変化させて親の子育て】を支えながら、自分たちで生活をつくりあげている親と子どもの成長を見守り【親子の成長】を支えていた。

看護師は【役割を変化させて親の子育てを支え】ながら【親子の成長】を支えることで家族のありように向きあい、親とともに子育てを行いその過程をともに歩むことで、親子とともに看護師自身が成長していると認識していた。

6. 考察

看護師は親との協働において、常に親の前に立ち親子をリードしているわけではなかった。親の子どもの世話や医療的ケアなどの手技の自立に合わせて働きかけを調節し、これからの子どもの生活をどのようにつくりあげていくかといった親の考えなどに合わせて役割を変化させていた。親ができるようになったことは親に任せ、親が迷ったときは一緒に考えるといった、親に対する柔軟な働きかけをすることにより、親の自律を促していたと考える。看護師による親との子育ての協働とは、子どもとともに人生をあゆもうとする親を支えて、親子とともに成長しながら親の自律を目指すことを意味していた。

謝辞

本研究にご協力くださいました皆様に感謝いたします。なお、本研究は2014年度前期公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団の助成を受けて行った。

感想

データ収集のための打ち合わせ、インタビューのために関東圏内 12 ヶ所の訪問看護ステーションに数回伺うことで、訪問看護ステーションの雰囲気に触れることができた。訪問看護ステーションのそれぞれが地域の特性に合わせて、地域で生活する医療的ケアが必要な子ども、成人の終末期、高齢者に対して看護を提供していることを知った。病院とは違う看護実践について話を聞くことで、患者中心の看護を提供するということはどういうことかを考える機会となり、自分が今まで実践してきた看護を振り返りながら研究をまとめていた。訪問看護師の親との協働における看護のあり方を研究としてまとめることだけでなく、自分の看護を振り返る機会を与えてくれた研究であった。